

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26870366

研究課題名(和文)スタンダールにみる19世紀美術批評の様相と文学と絵画の影響関係

研究課題名(英文) Critique of the nineteenth-century art and the relation between literature and picture in Stendhal

研究代表者

小林 亜美 (KOBAYASHI, Ami)

京都女子大学・文学部・講師

研究者番号：90597311

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000 円

研究成果の概要(和文)：文学と絵画の関係を探ることを目的に、スタンダールの現代フランス絵画論である『サロン評』のうち、特に絵画に関する言及の多い「1824年のサロン」を中心に研究を行った。スタンダールが特に高く評価している画家および文学との関連という観点から重要と思われる画家を選択し、スタンダールの評価を詳細に分析することで、スタンダールの芸術論をより精密に把握することができた。さらに、創作活動との関連については、主としてスタンダールにおける「真実」とは何かを追究することで、その一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the relationship between literature and pictures in << the Salons >>, discussion about modern French arts by Stendhal. In particular, I focused on << the Salon of 1824 >>, because this discussion includes plenty of references to pictures. I picked up some painters who were fully appreciated by Stendhal, and also some whom I considered important in connection with literature. By analyzing evaluations of them by Stendhal in detail, I could comprehend his artistic discussion minutely. Furthermore, by analyzing his creative activity, it was revealed that "the truth" in Stendhal had an important meaning.

研究分野：スタンダール研究

キーワード：スタンダール 19世紀 絵画 フランス

1. 研究開始当初の背景

(1) スタンダール研究を専門とする研究代表者は、特にスタンダールにおける文学と絵画の問題に関心を寄せている。イタリア絵画との関連では多くの先行研究があるが、スタンダールの生きた 19 世紀当時の絵画についてはあまり研究が進んでいない。ゆえに、スタンダールにおける現代絵画論と彼の創作活動との関係を探るための研究を開始することとした。

(2) 主たる分析対象はスタンダールの現代フランス美術評論である『サロン評』(1822 年、1824 年、1827 年)である。3 つのサロン評のなかでも、とりわけ絵画についての論が充実している「1824 年のサロン」を中心に扱うことを予定した。さらに、それを手がかりに、小説や短編等の創作作品成立への結びつきを探る計画を立てた。

2. 研究の目的

文学と絵画の影響関係という側面からスタンダールの作品を分析し、異種芸術間の照応関係から生まれる効果を探ることが目的である。スタンダールが生きた時代はロマン派の台頭期であり、ロマン派をめぐる論争が盛んに行われていた。スタンダールもそこで一役買っている。新たな芸術の傾向であるロマン派に対するスタンダールの態度を詳細に分析することで彼の芸術論を掘り下げるとともに、それが作家の創作活動にどのように影響したかを確認した。

3. 研究の方法

(1) スタンダールの『サロン評』を分析して、この作家が同時代のフランス絵画をどのように見ていたかを把握するとともに、絵画をめぐる言説が創作活動にどのように影響したかを考察した。

(2) それにあたっては、現在ではあまり知られていないが当時は高く評価されていた 19 世紀ロマン派のフランス画家たちについて十分な知識を得るため、また、作品を実際に鑑賞するために、渡仏する必要があった。ロマン派に特化したパリのロマン派美術館や、ロマン派の作品の所蔵が多く、19 世紀の絵画官展に関する資料も豊富なグルノーブル美術館などでの研究は特に実り多いものであった。また、グルノーブル市立図書館でもスタンダールに関連する貴重な資料を閲覧することができた。

そうした資料調査をもとに『サロン評』の分析をすすめていった。

4. 研究成果

(1) スタンダールの『サロン評』分析から、スタンダールにおける文学と絵画の影響関係の一端を明らかにした。

(2) 『サロン評』については、1822 年、1824 年、1827 年のそれぞれのサロン評およびその他日記や書簡から抜粋したサロン評に関わるテキスト等を、詳細な編者註とともに初めて一冊にまとめたことで定評のある以下の版本を主に使用した。Stendhal, *Salons*, Édition, introduction et notes de Stéphane Guégan et Martine Reid, Gallimard, 2002. あわせて、ピブリオフィル版等の既存の版本も参照するとともに、ロンドンの『パリ・マンズリー・レビュー』(*Paris Monthly Review*) に英訳で掲載され、スタンダール自身によるフランス語原稿が失われている「1822 年のサロン」に関しては、当該雑誌に掲載された英訳版も参照した(英訳版はグルノーブル市立図書館所蔵)。さらに、グルノーブル美術館併設図書室では、サロンのカタログの複写版を閲覧する機会を得て、それも貴重な資料として参照した。

(3) ロマン派が台頭してきた当時のフランス画壇に対する批評の全体的傾向、すなわち古典派対ロマン派の構図を念頭に置きつつ、「ロマン派寄りの中庸派」としてのスタンダールの立場を確認。スタンダールを「古典派寄りの中庸派」とする見方も見受けられるが、古典劇的に演出された人物像ではなく、真実味のある自然な表現を絵画に求めるスタンダールの姿勢は、当時のロマン派のそれと同じものであり、ロマン派的要素は十分に認められる。

ただし、スタンダールの絵画論には常に過去の芸術への愛惜がつきまといていることも確認した。過去の芸術とは、ダヴィッドらに代表される一世代前の新古典主義絵画ではなく、スタンダールが絵画に深い関心と愛を寄せるきっかけとなったルネサンス期のイタリア絵画に他ならない。なお、彼の場合、イタリア絵画との出会いは愛する女性の思い出と結びつくものでもあり、絵画を見る彼の眼差しはきわめて個人的なものである。以上のような点を踏まえ、『サロン評』にみられるスタンダールの芸術論を詳細に分析した。

(4) また、当時の絵画サロンが王政復古期のフランスにおいて、「官展」として国王の権威を特に意識したものであったことも考慮に入れる必要があった。それは、展示される絵画の主題に影響したようである。歴代フランス国王の栄光を描いた作品や、当時の王族を描いた作品が多く展示され、主要作品として扱われたらしい事実がその例と言えよう。スタンダールの『サロン評』は匿名で発表されているとはいえ、当時の雑誌に掲載されたものである以上、「官展」としての性質に全く縛られていなかったとは考えにくい。本研究ではこの点を大きくとりあげることにはなかったが、上記(3)につけ加えるべき留意点として挙げておきたい。

(5) 分析にあたっては、絵画に関する記述が最も充実している「1824年のサロン」を主に取り扱うこととした。この評論は3つのサロン評のうち最も大部で、内容もやや煩雑ながら豊であり、非常に多くの画家、多くの作品に言及している。そのため、効率的かつ効果的に研究をすすめるため、スタンダールの文脈で特に重要と思われる画家何人かに注目し、それぞれの画家についてのスタンダールの態度を検討するという手法をとった。主にとりあげたのは、「1822年のサロン」では「我々は、芸術における革命の前夜にいる」と述べ、「1824年のサロン」では「新たな一派が誕生した」と言っているスタンダールが、その新たな芸術の担い手としてその名を挙げている画家たちである。また、文学と絵画の関係を考える上で欠かせない画家も分析対象に加えた。以下では、それらの画家たちに対するスタンダールの評価を分析した結果のうち主要なものを簡潔に述べておく。

(6) アリ・シェフェール (Ary Scheffer, 1795-1858) は、1824年当時およそ30歳だった若手画家である。当時のフランス画派における「真実」の必要性を繰り返し唱えたスタンダールが、「真実」のある画家として挙げたひとりがこのシェフェールである。1824年の展示作品のひとつ「ガストン・ド・フォワの死」がある。ラヴェンナの戦いを描いたこの歴史画は、古典派の批評家からは、高貴さに欠けており、歴史画という偉大なるジャンルを汚したと酷評され、「ロマン派と言われる画家たちの荒々しさを模倣した」と非難された。反面、対立する批評家たちからはやや粗野ながら「ロマン派的熱狂」を生み出す、と評価されたものである。

この作品について、スタンダールもまた表現の荒っぽさに言及しつつも、その結果、「ラヴェンナの戦いを思わせるのではなく、画家が絵に表したほんの一瞬のことを強く考えさせる」としている。繰り返され得ない一瞬の美、一瞬の幸福を追いつめる傾向にあるスタンダールの文脈において、これは肯定的評価と言えよう。現にスタンダールは、服装や構図の難点に言及しつつも「真実と才知がある」点で高く評価しているのである。

(7) フランソワ・ジェラルール (François Gérard, 1770-1837) は、シェフェールより一世代ほど年長の画家であり、ルイ18世の第一画家も務めた、「王の画家にして画家の王」とも称される画家である。現代では一般的に師匠であるダヴィッド (Jacques-Louis David, 1748-1825) が創始した新古典主義に属すると評される。しかし、スタンダールにおいて、ジェラルールに関する評価と創作活動とは深い結びつきが認められる。また、ロマン派をめぐる議論とも無縁ではない。

全体的には、スタンダールはジェラルールを高く評価してはいない。「1822年のサロン」では、過去30年間のフランス画派の栄光を担ったひとりとしてジェラルールの名を挙げているが、画家としての才能を認めていたとは考えにくい。Dictionnaire de Stendhal のジェラルールの項目でも確認できるように、画才よりも商才に恵まれていたジェラルールを、スタンダールは画家としてよりは社交人として評価していたようである。そして、このジェラルール像は、スタンダールの未完の小説『リュシアン・ルーヴェン』の一登場人物を思い起こさせる。それは、主人公リュシアンの父で銀行家のルーヴェン氏である。スタンダールは手稿余白の書き込みに、社交術と政治的手腕に恵まれたルーヴェン氏のモデルの一人が画家ジェラルールであることを明記しているのである。

より文学と関わる問題として、ジェラルールが1824年のサロンに出展した2作品が挙げられる。ここではそのひとつ、《ミゼーノ岬のコリヌヌ》について述べておきたい。この作品はスタール夫人の小説『コリヌヌあるいはイタリア』に材をとった作品であり、描かれているのは小説の白眉とも言える場面、オズワルドを案内してナポリを訪れたコリヌヌが、ミゼーノ岬で彼や他の観光客、現地の住人たちを前に女預言者のごとく即興詩を歌う、という場面である。ジェラルールは同主題による作品を何点か描いており、最も有名なのはリヨン美術館所蔵作品である。スタンダールが見た1824年の出展作品は残念ながら現在所蔵先不明となっているようであるが、スタンダールの記述を見る限り、リヨン美術館所蔵作品と構図はきわめて近いものであるように思われる。

この作品について、スタンダールはまず、「ヨーロッパじゅうがスタール夫人の『コリヌヌ』を読み賞賛した」その記憶が消える前にこの主題を我が物としたジェラルールの時宜に叶った主題選択を讃える。さらに、コリヌヌについて、「心を揺さぶる彼女の眼から吹き出す炎」、コリヌヌの魂がそこにすっかり現れている「激しい火」を絶賛し、コリヌヌには「近代の人間が抱くような優しい情熱」があると評価する。これは極めてロマン派的な美点だと言えよう。なお、スタール夫人の文体に嫌悪を示していたスタンダールであるが、コリヌヌという人物については肯定的に評価していたことを付言する。その際、「火」や「炎」という、絵画評にも用いた語を頻用していた。小説から受けた印象を絵画に反映させて批評しているとも言えるスタンダールのこうした姿勢に、純粋な絵画評論家としての価値を問う向きもあるだろうが、研究代表者の関心を引くのは、文学と絵画を限りなく融合させて評価するその姿勢そのものである。

(8) ジャン＝ヴィクトル・シュネッツ

(Jean-Victor Schnetz, 1787-1870) は、現在ではあまり知られていないが、スタンダールがサロン評を書いた 1820 年代には、イタリアで大成功をおさめてフランスに凱旋した名声高い新進気鋭の画家であった。スタンダールも「1824 年のサロン」で一貫してシュネッツを高く評価している。ダヴィッド派すなわち古典派に対抗する新たな一派、すなわちロマン派を代表する一人と評しているのみならず、そうした若い画家たちの中でも「ライバルを遥かに超えているように思える」とまで述べているほか、「シュネッツの 2、3 の絵は 100 年後にも高く評価されていることだろう」と予言もしている。私信の中では「偉大なる画家」と呼んでおり、スタンダールがシュネッツに寄せ並々ならぬ関心は明らかであるにもかかわらず、スタンダール研究においてシュネッツに言及が及ぶことはほとんどない。ゆえに、研究代表者は、スタンダールにおけるシュネッツの位置づけを明らかにし、スタンダールにどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることとした。

シュネッツとスタンダールの足取りをたどってみると、スタンダールはしきりにシュネッツと親交を得る機会を求めているにもかかわらず、互いにフランスとイタリアその他の外国を行き来する両者の道は、奇妙なまでにすれ違いを見せている。晩年、スタンダールがチヴィタヴェッキアに駐在していた時、遠縁の画家エルネスト・エペール(Ernest Antoine Auguste Hébert, 1817-1908) がローマ留学のためにイタリアに入り、縁を求めてスタンダールのもとを訪れた。スタンダールはエペールのために、当時ローマ美術アカデミーの長として赴任してくることになっていたシュネッツ宛の紹介状を書いており、その中で「あなたと長い時間語り合える希望に胸をふるわせています」、「後日、芸術について語り合しましょう」とも綴っているが、その後間もなくスタンダールは病のためパリへ戻ることとなり、待望の面会の機会はおそらく得られなかったと推測される。

しかし、シュネッツの作品をスタンダールが高く評価したことは事実であり、その論評はスタンダールの芸術論のみならず、創作活動に関する問題にも結びつく。続けて、「1824 年のサロン」におけるシュネッツ評価について述べてみたい。

シュネッツの作品展のひとつ、《飢饉の時に貧民に施しを与える聖ジュヌヴィエーヴ》について、スタンダールは明暗法に欠けている、という、同時代のフランス画家たちを評する際の紋切り型の批判を寄せてもいるが、色彩を有している点、そして、「真実」がある点を認め、特に後者を「大画家の本質」としているのである。では、シュネッツの「真実」とは何であろうか。その答えは、《膝に子供を抱き、女占い師に手を差し伸べる幼いシクストゥスの母》に関する評から読み取

れる。この作品にも明暗法に欠けるという欠点を指摘しつつ、スタンダールは幼子の自然なポーズを讃える。しかし、若い母親については、「なぜシクストゥスの母はあまり美しくないのだろう？モデルが示す姿形から遠ざかりがちなシュネッツ氏は、わざとらしくなったり、古代の模倣に陥ったりすることを恐れているのだろうか？この若い女にもっとみずみずしい唇を与えることは、彼にはきわめて容易だったはずだ。シュネッツ氏には美的感覚が欠けているのか？」と疑問を投げかける。理想化された肖像画であるラファエロの聖母たちを「美しい嘘」として讃えたスタンダールにとって、欠点が残された肖像画、理想化を怠った絵画は美とは反対の位置にあると言えよう。スタンダールが賞賛する「真実」はここにはない。一方、この母親について、スタンダールが讃えるのは「疑いの年と希望」とが滲み出た表情の魅力である。その魅力がスタンダールに「それではあなたは、この子が教皇になると信じているのですか？」という印象的な台詞を想起させた。『イタリア絵画史』で《最後の晩餐》を論じるスタンダールが、「あなたがたの一人がわたしを裏切るだろう」というイエスの言葉を引きつつ、きわめて心理学的な解釈を行ったことはその代表例であるが、スタンダールにおいて物語と絵画とは密接に結びついており、小説の主題にさえなり得るような心理的ドラマを描き出している絵画にこそ、彼は「真実」を感じ取るのである。実際、シュネッツにはイタリアの山賊(brigand)やその愛人を描いた作品が数多くあるが、そうした昏い情熱を描いた作品群が、山賊を主題としたスタンダールの短篇作品のいくつか、『ヴァニナ・ヴァニニ』などに反映されている可能性も指摘したい。スタンダールがシュネッツに「真実」がある、とした理由はここにあるのではないだろうか。

(9) 以上のように、「1824 年のサロン」を繙くことで、スタンダールの芸術論とそこから派生する創作活動との結びつきの一端が明らかになった。芸術論の一部は『イタリア絵画史』に投げ返されることにもなるが、現代フランス絵画評である『サロン評』も、スタンダールにおいてきわめて重要な作品であり、かつ、今後さらに深く研究されるべきものである。研究代表者は当該研究期間中に得られた成果を踏まえて、さらに研究を発展させていく所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

小林 亜美、Le pouvoir des références picturales dans Lucien Leuwen et Le Chasseur vert, L'Année stendhalienne,

査読有、n° 14、2015、pp. 45-54。

小林 亜美、スタンダードとシュネッツ
-「1824 年のサロン」における「偉大な
る画家」-、EBOK、査読有、第 28 号、
2016 年、pp.43-60。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

小林 亜美 (KOBAYASHI, Ami)
京都女子大学・文学部・講師
研究者番号：90597311

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：